

耕耘部の時計

宮沢賢治

青空文庫

一、午前八時五分

農場の耕耘部かうりんぶの農夫室は、雪からの反射で白びかりがいつぱいでした。

まん中の大きな釜かまからは湯気が盛んにたち、農夫たちはもう食事もすんで、脚絆きゃはんを巻いたり藁沓わらぐつをはいたり、はたらきに出る支度をしてゐました。

俄にはかに戸があいて、赤い毛布けつとでこさへたシャツを着た若い血色のいゝ男がはひつて来ました。

みんなは一ぺんにそつちを見ました。

その男は、黄いろなゴムの長靴ながぐつをはいて、脚をきちんとそろへて、まっすぐに立つて云ひました。

「農夫長の宮野目さんはどなたですか。」

「おれだ。」

かゞんで炉に靴下を乾かしてゐたせいの低い犬の毛皮を着た農夫が、腰をのぼして立ちあがりました。

「何か用かい。」

「私は、今事務所から、こちらで働らけと云はれてやって参りました。」

農夫長はうなづきました。

「さうか。丁度いゝ所だった。昨夜はどこへ泊った。」

「事務所へ泊りました。」

「さうか。丁度よかつた。この人について行つて呉れ。玉蜀黍きのみの脱穀くをしてるんだ。機械は八時半から動くからな。今からすぐ行くんだ。」農夫長は隣りで脚絆きんぱんを巻いてゐる顔のまっ赤な農夫を指しました。

「承知しました。」

みんなはそれつきり黙つて仕度しました。赤シャツはみんなの仕度する間、入口にまっすぐに立つて、室へやの中を見まはしてゐましたが、ふと室の正面にかけてある円い柱時計を見あげました。

その盤ダイヤル一面は青じろくて、ツルツル光つて、いかにも舶来の上等らしく、どこでも見たことのないやうなものでした。

赤シャツは右腕をあげて自分の腕時計を見て何気なく低くつぶやきました。

それはたちまち器械の中で、きれいな黄色の穀粒と白い細長い芯しんとにわかれて、器械の両側に落ちて来るのでした。今朝来たばかりの赤シャツの農夫は、シャベルで落ちて来る穀粒をしゃくって向ふに投げ出してゐました。それはもう黄いろの小山を作つてゐたのです。二人の農夫は次から次とせはしく落ちて来る芯を集めて、小屋のうしろの汽罐室きくわんしつに運びました。

ほこりはいっぱい立ち、午ひるちかくの日光は四つの窓から四本の青い棒になつて小屋の中に落ちました。赤シャツの農夫はすっかり塵ちりにまみれ、しきりに汗をふきました。

俄にはかにピタツとたうもろこしの粒の落ちて来るのがとまりました。それからもう四粒ばかりぼろぼろつところがつて来たと思ふとあとは器械ばかりまるで今までとちがった楽なやうな音をたてながらまはりつゞけました。

「無くなつたな。」赤シャツの農夫はつぶやいて、も一度シャツの袖そででひたひをぬぐひ、胸をはだけて脱穀小屋の戸口に立ちました。

「これで午だ。」天井でも叫んでゐます。

る、る、る、る、る、る、る、る、る、る。

器械はやつぱり凍つたはたけや牧草地の雪をふるはせてまはつてゐます。

脱穀小屋の庇の下に、貯蔵庫から玉蜀黍のそりを牽いて来た二疋の馬が、首を垂れてだまつて立つて居ました。

赤シャツの農夫は馬に近よつて頸を平手で叩かうとしました。

その時、向ふの農夫室のうしろの雪の高みの上に立てられた高い柱の上の小さな鐘が、前後にゆれ出し音はカランカランカランとうつくしく雪を渡つて来ました。今までじつと立つてゐた馬は、この時一緒に頸をあげ、いかにもきれいに歩調を踏んで、厩の方へ歩き出し、空のそりはひとりで馬について雪を滑つて行きました。赤シャツの農夫はすこしわらつてそれを見送つてゐましたが、ふと思ひ出したやうに右手をあげて自分の腕時計を見ました。そして不思議さうに、

「今度は合つてゐるな。」とつぶやきました。

三、午后零時五十分

午の食事が済んでから、みんなは農夫室の火を囲んでしばらくやすんで居ました。炭火はチラチラ青い焰を出し、窓ガラスからはうるんだ白い雲が、額もかつと痛いやうなまつ

青なそらをあてなく流れて行くのが見えました。

「お前、郷里くりにはどこだ。」農夫長は石炭函せきたんぼこにこしかけて両手を火にあぶりながら今朝来た赤シャツにたづねました。

「福島です。」

「前はどこに居たね。」

「六原ろくはらに居りました。」

「どうして向ふをやめたんだい。」

「一ぺん郷国くにへ帰りましてね、あすこも陰気でいやだから今度はこつちへ来たんです。」

「さうかい。六原に居たんぢや馬は使へるだらうな。」

「使へます。」

「いつまでこつちに居る積りだい。」

「ずっと居ますよ。」

「さうか。」農夫長はだまつてしまひました。

一人の農夫が兵隊の古外套ふるぐわいたうをぬぎながら入つて来ました。

「場長は帰つてゐるかい。」

「まだ帰らないよ。」

「さうか。」

時計ががちつと鳴りました。あの蒼白あをしろいつるつるの瀬戸でできてゐるらしい立派な盤ダイアルの時計です。

「さあぢき一時だ、みんな仕事に行つて呉れ。」農夫長が云ひました。

赤シャツの農夫はまたこつそりと自分の腕時計を見ました。

たしかに腕時計は一時五分前なのにその大きな時計は一時二十分前でした。農夫長はぢき一時だと云ひ、時計もたしかにがちつと鳴り、それに針は二十分前、今朝は進んでさつきは合ひ、今度は十五分おくれてゐる、赤シャツはぼんやりダイアルを見てゐました。

俄にはかに誰たれかがクスクス笑ひました。みんなは続いてどつと笑ひました。すっかり今朝の通りです。赤シャツの農夫はきまり悪さうに、急いで戸をあけて脱穀小屋の方へ行きました。あとではまだみんなの気のよささうな笑ひ声にまじつて、

「あいつは仲々気取つてるな。」

「時計ばかり苦にしてるよ。」といふやうな声が聞えました。

四、

日暮れからすつかり雪になりました。

外ではちらちら雪が降つてゐます。

農夫室には電燈が明るく点き、火はまつ赤に熾りました。

赤シャツの農夫は炉のそばの土間に燕麦オートの稗わらを一束敷いて、その上に足を投げ出して座り、小さな手帳に何か書き込んでゐました。

みんなは本部へ行つたり、停車場まで酒を呑みに行つたりして、室へやにはたゞ四人だけでした。

(二月十日、玉蜀黍きみ脱穀)と赤シャツは手帳に書きました。

「今夜積るぞ。」

「一尺は積るな。」

「帝たいしやく 釈しゃくの湯で、熊くま又捕れたつてな。」

「さうか。今年は二疋目だな。」

その時です。あの蒼白い美しい柱時計がガンガンガン六時を打ちました。

藁わらの上の若い農夫はぎよつとしました。そして急いで自分の腕時計を調べて、それからまるで食ひ込むやうに向ふの怪しい時計を見つめました。腕時計も六時、柱時計の音も六時なのにその針は五時四十五分です。今度はおくれたのです。さつき仕事を終つて帰つたときは十分進んでゐました。さあ、今だ。赤シャツの農夫はだまって針をにらみつけました。二人の炉ばたの百姓たちは、それを見て又面白さうに笑つたのです。

さあ、その時です。いままで五時五十分を指してゐた長い針が俄にはかに電いなづまのやうに飛んで、一ぺんに六時十五分の所まで来てぴたつととまりました。

「何だ、この時計、針のねぢが緩んでるんだ。」

赤シャツの農夫は大声で叫んで立ちあがりました。みんなも一度わらひました。

赤シャツの農夫は、窓ぶちにのぼつて、時計の蓋ふたをひらき、針をがたがた動かして見ながら、盤に書いてある小さな字を読みました。

「この時計、上等だな。巴里パリ製だ。針がゆるんだんだ。」

農夫は針の上のねぢをまはしました。

「修繕したのか。汝うな、時計屋に居たな。」炉のそばの年老としとつた農夫が云ひました。若い農夫は、も一度自分の腕時計に柱時計の針を合せて、安心したやうに蓋をしめ、ぴよんと土

間にはね降りました。

外では雪がこんこんこん降り、酒を《の》呑みに出掛けた人たちも、停車場まで行くのはやめたらうと思はれたのです。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十卷」筑摩書房

1979（昭和54）年9月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年4月20日初版第5刷発行

入力：林 幸雄

校正：今井忠夫

2003年4月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

耕耘部の時計

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>